

国

語

(  
解答番号

1

～

36

(

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に

(配点 50)

① 着せ替え人形の<sup>(注1)</sup>リカちゃんは、一九六七年の初代から現在の四代目に至るまで、世代を超えて人気のある国民的キャラクターです。その累計出荷数は五千万体を超えるそうですから、まさに世代を越えた国民的アイドルといえるでしょう。しかし、時代の推移とともに、そこには変化も見受けられるようです。かつてのリカちゃんは、子どもたちにとって憧れの生活スタイルを演じてくれるイメージ・キャラクターでした。彼女の父親や母親の職業、兄弟姉妹の有無など、その家庭環境についても発売元のタカラトミーが情報を提供し、設定されたその物語の<sup>(注2)</sup>枠組のなかで、子どもたちは「こっこ遊び」を楽しんだものでした。

② しかし、平成に入ってからのリカちゃんは、その物語の枠組から徐々に解放され、現在は<sup>(注2)</sup>ミニーマウスや<sup>(注3)</sup>ポストペットなどの別キャラクターを演じるようになっていきます。自身がキャラクターであるはずのリカちゃんが、まったく別のキャラクターになりきるのです。これは、評論家の伊藤剛さん<sup>(注4)</sup>による整理にしたがうなら、特定の物語を背後に背負ったキャラクターから、その略語としての意味から脱却して、どんな物語にも転用可能な<sup>(注5)</sup>プロトタイプを示す言葉となったキャラへと、**A**リカちゃんの捉えられ方が変容していることを示しています。

③ 物語から独立して存在するキャラは、<sup>(注6)</sup>「やおい」などの二次創作と呼ばれる諸作品のなかにも多く見受けられます。その作者たちは、一次作品からキャラクターだけを取り出して、当初の作品のストーリーとはかけ離れた独自の文脈のなかで自由に操ってみせます。しかし、どんなストーリーのなかに置かれても、あらかじめそのキャラに備わった特徴は変わりません。たとえば、いくらミニーマウスに変身しても、リカちゃんはリカちゃんであるのと同じことです。

④ このような現象は、物語の主人公がその枠組に縛られていたキャラクターの時代には想像できなかったことです。物語を破壊してしまう行為だからです。こうしてみると、キャラクターのキャラ化は、**B**人びとに共通の枠組を提供していた「大きな

物語」が失われ、価値観の多元化によって流動化した人間関係のなかで、それぞれの対人場面に適合した外キャラを意図的に演じ、複雑になった関係を乗り切っていくとする現代人の心性を暗示しているようにも思われます。

5 振り返ってみれば、「大きな物語」という揺籃(注7)のなかでアイデンティティの確立が目指されていた時代に、このようにふるま

うことは困難だったはずです。付きあう相手や場の空気に応じて表面的な態度を取り、ツクロ(ア)うことは、自己欺瞞(ズマン)と感じられて後ろめたさを覚えるものだったからです。アイデンティティとは、外面的な要素も内面的な要素もそのまま併存させておくのではなく、揺らぎをはらみながらも一貫した文脈へとそれらをシユウ(イ)ソクさせていくとするものでした。

6 それに対して、今日の若い世代は、アイデンティティという言葉で表わ(あら)されるような一貫したものとしてではなく、キャラという言葉で示されるような断片的な要素を寄せ集めたものとして、自らの人格をイメージするようになっていきます。アイデンティティは、いくども揺らぎを繰り返しながら、社会生活のなかで徐々に構築されていくものですが、キャラは、対人関係に依拠して意図的に演じられる外キャラにしても、生まれもった人格特性を示す内キャラにしても、あらかじめ出来上がっている固定的なものです。したがって、その輪郭が揺らぐことはありません。状況に応じて切り替えられはしても、それ自体は変化しないソリッドなものののです。(注8)

7 では、自分の本心を隠したまま、所属するグループのなかで期待される外キャラを演じ続けることは、人間として不誠実であり、いい加減な態度なのでしょうか。現在の日本では、とくに若い世代では、どれほど正しく見える意見であろうと、別の観点から捉え直された途端に、その正当性がたちまち揺らいでしまいかねないような価値観の多元化が進んでいます。自己評価においてだけでなく、対人関係においても、一貫した指針を与えてくれる物差しを失っています。

8 現在の人間関係では、ある場面において価値を認められても、その評価はその場面だけで通じるものでしかなく、別の場面に移った途端に否定されるか、あるいは無意味化されてしまうことが多くなっています。人びとのあいだで価値の物差しが共有されなくなり、その個人差が大きくなっているために、たとえ同じ人間関係のなかにおいても、その時々状況ごとに、平た

くいえばその場の気分しだいで、評価が大きく変動するようになっていくのです。

9 私たちの日々の生活を<sup>(ウ)</sup>カエリみても、ある場面にいる自分と別の場面にいる自分とが、それぞれ異なった自分のように感じられることが多くなり、そこに一貫性を見出すことは難しくなっています。それらがまったく正反対の性質のものであることも少なくありません。最近の若い人たちは、このようなふるまい方を「キャラリング」とか「場面で動く」などと表現しますが、一貫したアイデンティティの持ち主では、むしろ生きづらい錯綜<sup>さくそう</sup>した世の中になっているのです。

10 しかし、ハローキティやミッフィーなどのキャラを思い起こせばすぐに気づくように、最小限の線で描かれた単純な造形は、私たちに強い印象を与え、また把握もしやすいものです。生身のキャラの場合も同様であって、あえて人格の多面性を削ぎ落とし、限定的な最小限の要素で描き出された人物像は、錯綜した不透明な人間関係を単純化し、透明化してくれるのです。

11 また、きわめて単純化された人物像は、どんなに場面が変化しようと臨機応変に対応することができます。日本発のハローキティやオランダ発のミッフィーが、いまや特定の文化を離れて万国で受け入れられているように、特定の状況を前提条件としなくても成り立つからです。<sup>C</sup> 生身のキャラにも、単純明快でくつきりとした輪郭が求められるのはそのためでしょう。

12 二〇〇八年には、ついにコンビニエンス・ストアの売上高が百貨店のそれを超えました。外食産業でもファーストフード化が進んでいます。百貨店やレストランの店員には丁寧な接客態度が期待されますが、コンビニやファーストフードの店員にはそれが期待されません。感情を前面に押し出して個別的に接してくれるよりも、感情を背後に押し殺して定形的に接してくれるほうが、むしろ気をつかわなくて楽だと客の側も感じ始めているのではないのでしょうか。店員に求められているのは、一人の人間として多面的に接してくれるのではなく、その店のキャラを一面的に演じてくれることなのです。近年のメイド・カフェの流行も、その外見に反して、じつはこの心性の延長線上にあるといえます。そのほうが、対面下での感情の負荷を下げられるからです。

13 こうしてみると、人間関係における外キャラの呈示は、それぞれの価値観を根底から異にってしまった人間どうしが、予想

もつかないほど多様に変化し続ける対人環境のなかで、しかし互いの関係をけっして決裂させることなく、コミュニケーションを成立させていくための技法の一つといえるのではないだろうか。深部まで互いに分かりあって等しい地平に立つことを目指すのではなく、むしろ互いの違いを的確に伝えあつてうまく共生することを目指す技法の一つといえるのではないだろうか。彼らは、複雑化した人間関係の破綻を<sup>(エ)</sup>カイヒし、そこに明瞭性と安定性を与えるために、相互に協力しあつてキャラを演じあっているのです。複雑さを<sup>(オ)</sup>シユクゲンすることで、人間関係の見通しを良くしようとしているのです。

[14] したがって、外キャラを演じることは、けっして自己欺瞞ではありませんし、相手を騙す<sup>だま</sup>ことでもありません。たとえば、ケータイの着メロの選択や、あるいはカラオケの選曲の仕方、その人のキャラが決まってしまうこともあるように、キャラとはきわめて単純化されたものに違いはありません。しかし、ある側面だけを切り取って強調した自分らしさの表現であり、その意味では個性の一部なのです。うそ偽りの仮面や、強制された役割とは基本的に違うものです。

[15] キャラは、人間関係を構成するジグソーパズルのピースのようなものです。一つ一つの輪郭は単純明快ですが、同時にそれぞれが異なつてもいるため、他のピースとは取り替えができません。また、それらのピースの一つでも欠けると、予定調和の関係は成立しません。その意味では、自分をキャラ化して呈示することは、他者に対して誠実な態度といえなくもないでしょう。D 価値観が多元化した相対性の時代には、誠実さの基準も変わっていかざるをえないのです。

(土井隆義<sup>どい たかよし</sup>『キャラ化する／される子どもたち』による)

(注)

- 1 リカちゃん——少女の姿形をモチーフにした着せ替え人形。
- 2 ミニーマウス——企業が生み出したキャラクター商品で、ネズミの姿形をモチーフにしている。「ハローキティ」「ミッフィー」も同様のキャラクター商品として知られており、それぞれネコ、ウサギの姿形をモチーフにしている。
- 3 ポストペット——コンピューターの画面上で、電子メールを送受信し、管理するためのアプリケーション・ソフトウェアの一つ。内蔵されたキャラクター(主に動物)が、メールの配達などを行う。
- 4 伊藤剛——マンガ評論家(一九六七)。著書に『テヅカ・イズ・デッド——ひらかれたマンガ表現論へ』などがある。
- 5 プロトタイプ——原型、基本型。
- 6 「やおい」などの二次創作——既存の作品を原作として派生的な物語を作り出すことを「二次創作」と呼ぶ。原作における男性同士の絆に注目し、その関係性を読みかえたり置きかえたりしたものを「やおい」と呼ぶことがある。  
きずな
- 7 揺籃——ゆりかご。ここでは、比喩的に用いられている。
- 8 ソリッドなもの——定まった形をもったもの。
- 9 メイド・カフェ——メイドになりきった店員が、客を「主人」に見立てて給仕などのサービスを行う喫茶空間。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1  
5

(ア)

ツクロウ  
1

- ⑤ ゼン問答のようなやりとり  
④ 学生ゼンとしたよそおい  
③ 建物のエイゼン係を任命する  
② 事件のゼンヨウを説明する  
① 収益のゼンゾウを期待する

(イ)

シュウソク  
2

- ⑤ ソクバクから逃れる手段  
④ 両者イッショクソクハツの状態  
③ ヘイソクした空気の打破  
② 健康をソクシンする環境整備  
① 度重なるハンソクによる退場

(ウ)

カエリみても  
3

- ⑤ コリヨの末の優しい言葉  
④ コドクで華麗な生涯  
③ 一同をコブする言葉  
② コシキゆかしき伝統行事  
① コイか過失かという争点

(エ)

カイヒ  
4

- ⑤ 海外のタイカイに出場する  
④ タイカイに飛び込み泳ぐ  
③ 方針を一八〇度テンカイする  
② 天使がゲカイに舞い降りる  
① 個人の考えをカイチンする

(オ)

シュクゲン  
5

- ⑤ キンシュク財政を守る  
④ 紳士シュクジョが集う  
③ シュクテキを倒す日が来た  
② シュクシュクと仕事を進めた  
① 前途をシュクして乾杯する

問2 傍線部A「リカちゃんの捉えられ方が変容している」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

① ⑤ のうちから一つ選べ。 解答番号は 6。

- ① かつては、憧れの生活スタイルを具現するキャラクターであったリカちゃんが、設定された枠組から解放され、その場その場の物語に応じた役割を担うものへと変わっているということ。
- ② 発売当初は、特定の物語をもっていたリカちゃんが、多くの子どもたちの「ごっこ遊び」に使われることで、世代ごとに異なる物語空間を作るものへと変わっているということ。
- ③ 一九六七年以来、多くの子どもたちに親しまれたリカちゃんが、平成になってからは人気のある遊び道具としての意味を逸脱して、国民的アイドルといえるものへと変わっているということ。
- ④ 以前は、子どもたちが憧れる典型的な物語の主人公であったリカちゃんが、それまでの枠組に縛られず、より身近な生活スタイルを感じさせるものへと変わっているということ。
- ⑤ もともとは、着せ替え人形として開発されたリカちゃんが、人びとに親しまれるにつれて、自由な想像力を育むイメージ・キャラクターとして評価されるものへと変わっているということ。



問3

傍線部B「人びとに共通の枠組を提供していた『大きな物語』とあるが、この場合の「人びと」と「大きな物語」の関係はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7

- ① 「人びと」は、社会のなかの価値基準を支える「大きな物語」を共有することで、自己の外面的な要素と内面的な要素とを比べながら、臨機応変に複数の人格のイメージを使い分けようとしていた。
- ② 「人びと」は、社会のなかの価値基準を支える「大きな物語」を共有することで、自己の外面的な要素と内面的な要素との隔たりに悩みながらも、矛盾のない人格のイメージを追求していた。
- ③ 「人びと」は、社会のなかの価値基準を支える「大きな物語」を共有することで、自己の外面的な要素と内面的な要素とのずれを意識しながらも、社会的に自立した人格のイメージを手に入れようとしていた。
- ④ 「人びと」は、社会のなかの価値基準を支える「大きな物語」を共有することで、自己の外面的な要素と内面的な要素とを重ねあわせながら、生まれもった人格のイメージを守ろうとしていた。
- ⑤ 「人びと」は、社会のなかの価値基準を支える「大きな物語」を共有することで、自己の外面的な要素と内面的な要素とを合致させながら、個別的で偽りのない人格のイメージを形成しようとしていた。

問4 傍線部C「生身のキャラにも、単純明快でくつきりとした輪郭が求められる」とあるが、それはなぜか。その説明として最

も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8。

① ハローキティやミッフィーなどは、最小限の線で造形されることで、国や文化の違いを超越して認識される存在になったが、人間の場合も、人物像が単純で一貫性をもっているほうが、他人と自分との違いが明確になり、互いの異なる価値観も認識されやすくなるから。

② ハローキティやミッフィーなどは、最小限の線で造形されることで、その個性を人びとが把握しやすくなったが、人間の場合も、人物像の個性がはつきりして際だっているほうが、他人と交際するときに自分の性格や行動パターンを把握されやすくなるから。

③ ハローキティやミッフィーなどは、最小限の線で造形されることで、特定の文化を離れて世界中で人気を得るようになったが、人間の場合も、人物像の多面性を削ることで個性を堅固にしたほうが、文化の異なる様々な国での活躍が評価されるようになるから。

④ ハローキティやミッフィーなどは、最小限の線で造形されることで、その特徴が人びとに広く受容されたが、人間の場合も、人物像の構成要素が限定的で少ないほうが、人間関係が明瞭になり、様々な場面の変化にも対応できる存在として広く受け入れられるから。

⑤ ハローキティやミッフィーなどは、最小限の線で造形されることで、様々な社会で人びとから親しまれるようになったが、人間の場合も、人物像が特定の状況に固執せずに素朴であるほうが、現代に生きづらさを感じる若者たちに親しまれるようになるから。

問5

次に示すのは、この文章を読んだ五人の生徒が、「誠実さ」を話題にしている場面である。傍線部D「価値観が多元化した相対性の時代には、誠実さの基準も変わっていかざるをえないのです。」という本文の趣旨に最も近い発言を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9。

① 生徒A——現代では、様々な価値観が認められていて、絶対的に正しいとされる考え方なんて存在しないよね。でも、そんな時代だからこそ、自分の中に確固とした信念をもたなくてはいけないはず。他者に対して誠実であろうとするときには、自分が信じる正しさを貫き通さないと、つて思う。

② 生徒B——えっ、そう？ 今の時代、自分の信念を貫き通せる人なんて、そんなにいないんじゃないかな。何が正しいか、よく分からない時代だし。状況に応じて態度やふるまいが変わるのも仕方がないよ。そういう意味で、キャラを演じ分けることも一つの誠実さだと思うんだけど。

③ 生徒C——たしかに、キャラを演じ分けることは大切になってくるだろうね。でも、いろんなキャラを演じているうちに、自分を見失ってしまう危険がある。だから、どんなときでも自分らしさを忘れないように意識すべきだと思う。他者よりも、まずは自分に対して誠実でなくっちゃ。

④ 生徒D——うーん、自分らしさって本当に必要なのかな？ 外キャラの呈示が当たり前になっている現代では、自分の意見や感情を前面に出すのは、むしろ不誠実なことだと見なされているよ。自分らしさを抑えて、キャラになりきることのほうが重要なのでは？

⑤ 生徒E——自分らしさにこだわるのも、こだわらないのも自由。それが「相対性の時代」ってことでしょ。キャラを演じてもいいし、演じなくてもいい。相手が何を考えているかなんて、誰にも分からないんだから、他者に対する誠実さそのものが成り立たない時代に来ているんだよ。

問 6 この文章の表現と構成・展開について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) この文章の第1～5段落の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号

は  
10。

- ① 第1段落の第4文の「生活スタイルを演じてくれる」という表現は、「ゝを演じる」と表現する場合とは異なつて、演じる側から行為をうける側に向かう敬意を示している。
- ② 第2段落の第3文の「評論家のゝ整理にしたがうなら」という表現は、論述の際には他人の考えと自分の考えを区別するというルールを筆者が踏まえていることを示している。
- ③ 第4段落の第3文の「ゝしているようにも思われます」という表現は、「ゝしています」と表現する場合とは異なつて、断定を控えた論述が行われていることを示している。
- ④ 第5段落の第3文の「揺らぎをはらみながらも」という表現は、「揺らぎ」というものが、外側からは見えにくいが確かに存在するものであることを暗示している。

(ii) この文章の第7段落以降の構成・展開に関する説明として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解

答番号は 11。

- ① 第7段落では、まず前段落までの内容を踏まえながら新たな問いを提示して論述の展開を図り、続けて、その問いを考えるための論点を提出している。
- ② 第10段落では、具体的なキャラクターを例に挙げて第9段落の内容をとらえ直し、第11段落では、第10段落と同一のキャラクターについて別の観点を提示している。
- ③ 第12段落では、百貨店やコンビニエンス・ストアなどの店員による接客といった具体例を挙げて、それまでとはやや異質な問題を提示し、論述方針の変更を図っている。
- ④ 第13段落では、「～ないでしょうか」と表現を重ねることで慎重に意見を示し、第14段落では、日常での具体例を挙げながら、第13段落の意見から導き出される結論を提示している。

## 第2問

次の文章は、佐多稲子の小説「三等車」の全文である。この小説が発表された一九五〇年代当時、鉄道の客車には一等から三等までの等級が存在した。「私」は料金の最も安い三等車に乗り込み、そこで見た光景について語っている。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

鹿児島ゆきの急行列車はもういっぱい乗客が詰まっていた。小さな鞆かまんひとつ下げた私は、階段を駆け登ってきて、それでもいくら空いた車をとおもって、人の顔ののぞく窓を見渡しながら、せかせかと先きへ歩いていた。人の間をすり抜けてきた若い男が、

「お客さん一人？」

5 と、斜めに肩を突き出すようにして言った。

「え、ひとり」

「たった、ひとつだけ坐席ざせきがあるよ」

「いくら？」

(注1)  
「二百円」

「どう？」

「ちよつと待ってね」

坐席を闇で(注2)買うのは初めてだった。が話は聞いていたので、私はその男との応対も心得たふうに言つて、内心ほつとしていた。名古屋で乗りかえるのだったが、今朝まで仕事をして、今夕先方へ着けばすぐ用事があった。

15 坐席屋の男はすぐ戻ってきて、私をひとつの車に連れ込んだ。通路ももう窮屈きうくつになっている間を割り込んで行き、ひとつの窓ぎわの席にいた男に、目くばせした。

「いの席」

「ありがとう」

私はそつと、二百円を手渡して、坐席にいた男の立つてくると入れかわった。私は周囲に対して少し照れながら再びほつとした。

長距離の三等車の中は、小さな所帯(注3)をいっぱい詰め込んだように、荷物などもごたごたして、窓から射し込む朝陽(あさひ)の中に、ほこり立っていた。

前の坐席にいた、五十年配の婦人が、私に顔を差し出して、

「あなたも坐席をお買いになったんですか」

「ええ」

「いくらでした」

「二百円でした」

「ああ、じゃおなじですよ」

先方も、私も、安心したようになって、そして先方はつづけた。

「つい、遠くへ行くんじゃないやね。二百円でも出してしまいますよ」

「そうですね」

30 発車までには二十分ぐらいはある筈(はず)だった。乗客はまだ乗り込んでいた。もう通路に立つばかりだった。十二月も半ばになつて帰省する学生もいたし、何かと慌ただしい往来もあるのだろう。どうせ遠くまで行くのだろうけれど、諦めたように立つたままの人もあり、通路に自分の坐り場所(すわ)を作る人もある。その中をまた通つてくる乗客は自分の身の置き場を僅か見つけると、そこへ立つて荷物を脚の下においたりした。丁度私たちの坐席のそばにきて、そこで足をとめたのも、まあ乗り込んだだけで仕方がない、というように混雑に負けた顔をして、網棚を見上げるでもなく、(イ)無造作に袋や包みを下においた。工員ふうの若い夫婦で、三つ位の男の子を連れ、妻の方はねんね(注4)こ絆纏(ばんてん)で赤ん坊を負ぶつていた。痩せて頭から顔のほっそりした男の子

40 は、傍らの父親によく似ていた。普段着のままの格好だ。両親に連れ込まれた、汽車の中はこういうものだともおもうように、おとなしく周囲を見て突っ立っている。が母親に負われた赤ん坊は、人混みにのぼせたように泣き出しはじめた。はだけたねんねこの襟の下に赤い色のセーターを見せた母親は、丸い唇を尖がらせたようにして、ゆすり上げたが、誕生をむかえた位の赤ん坊はいよいよのけ反って、混雑した車内のざわめきをかき立てるように泣く。

妻と対い合<sup>むか</sup>って立っている父親は、舌打ちをし、

「ほら、ほら」

と、妻の肩の上の赤ん坊をあやしながら眉をしかめている。袋の中から一枚のビスケットを取り出して、赤ん坊の口にくわえさせようとするのだが、赤ん坊がのけ反るので、まるで、押し込むような手つきになる。赤ん坊は却<sup>かえ</sup>って泣き立てる。

45 「何とか泣きやまさせないか」

夫は苛<sup>いら</sup>々するように細いかん高い声で言った。妻の方は夫が赤ん坊の口にビスケットをねじり込むようにするときも、視線をはずしたようにしていたが、

「おなかが空いてるのよ」

当てつけるように言って、身体をゆすった。

50 夫婦の会話は、汽車に乗り込むまでに、もう二人の神経が昂<sup>たかぶ</sup>って、言い合いでもしてきた調子である。男の子はその間のび上るようにして窓から外を見ている。出がけの忙しかったことごとくを感じさせるように若い妻のパーマネントの髪はさばさして、口紅がはずれてついている。それがつんとしているの、妙に肉感的だ。夫は、妻の口調で一層煽<sup>あお</sup>られたように、

「じゃア、俺アもう行くよ」

と言った。妻は黙って視線をはずしている。

55 夫婦連れかとおもったが、夫は見送りだけだった。黙っている妻を残して、夫は車を出て行った。出ていったまま窓の外にも顔を出さない。妻もまたそれを当てにするふうでもなく、夫が出てしまうと、彼女はひとりになった覚悟をつけたように、手さ



げ籠の中から何か取り出して、男の子に言った。

「ケイちゃん、ここで待つてなさいね。どこにも行くんじゃないよ。母ちゃん、すぐ帰ってくるからね」  
父親の出てゆくときも放り出されていた男の子は、ウン、と、不安げな返事をした。

「ここにいらつしやい」

私は男の子を呼び、若い母にむかつてうなずいた。

「あずかつてて上げますわ」

「そうですか、お願いします」

彼女はねんねこ絆纏の身体で、人を分けて出ていったが、そのあとを見て、男の子は低い声で、

「母ちゃん」

と、言った。遠慮がちに心細さをつい声に出したというような、ひとり言のような声だ。

「すぐ、母ちゃん来るわ」

と私が言うと、男の子は窓近くなった興味で、不安をまぎらしたように、ガラスに顔をつけて母を追うのを忘れた。

やがて発車のベルが鳴り出した。母親はどこへ行ったのかまだ帰って来ない。が、それまで姿の見えなかった、若い父親が、

70 ホーム側の窓からのぞき込んで、男の子を呼んだ。

「ケイちゃん、ケイちゃん、じゃ行つておいでね」

その声で男の子は、するすると人の間をホーム側の窓へ渡つていくと、黙つて、その窓に小さい足をかけて父親の方へ出ようとした。はき古したスツク(注6)の黒い靴が窓ぶちにかかるのを、

「駄目、駄目、おとなしくしてるんだよ」

75 窓の外からその足の中へおろして、

「握手、ね」

と、父親は子どもの手を握って振った。ベルが止んで汽車が動き出した。

「さよなら」

父の言葉にも、子どもは始終黙っていた。父親の汽車を離れてのぞく姿が見え、すぐそれも見えなくなると、子どもはちゃんと承知したように、反対側の私のそばに戻って、動いてゆく窓の外をのぞいた。母親はどうしたのだろう、と私の方が不安になった頃、彼女はお茶のびんを抱えて戻ってきた。もう私の他に周囲の人もこの親子に注意をひかれている。

「ケイちゃん、おとなしくしてたの」

母親に呼ばれて、男の子はそれで殊更に安心した素ぶりを見せるでもなく、ただ身体を車内に向けた。

彼女は、言い合いのまま車を出ていった夫が、やっぱり発車までホームに残っていたということを知らずにいるのだ。A  
何  
か私の方が残念な気がして言い出す。

「汽車が出るとき、子どもさんはお父さんと握手しましたよ」

すると、彼女は伏目<sup>ふしめ</sup>に弱く笑って、

「そうですか」

そしてしゃがんで、手さげ籠の中をぐそぐそかきまわした。毎日八百屋の買物<sup>かいもの</sup>に下げていたらしい古びた籠である。何かごたごたと入っている。もうひとつの布の袋からも口からはみ出すようにして、おしめなどのぞいている。その二つが彼女の持物<sup>もちもの</sup>だ。

「大変ですね」

と言うと、鼻をすすり上げるようにして、

「父ちゃんがもう少し気を利かしてくれればいいんですけどねえ」

95  
そう言って、ミルクの缶や、小さな薬缶<sup>やかん</sup>や牛乳びんなどを取り出した。彼女は買ってきたお茶で、赤ん坊の乳を作るのだ。私  
のとなりの坐席にいた会社員らしい若い男も、席を詰めて、彼女の乳作りの道具をおく場所をあけてやった。彼女はうっとうし

い表情のまま粉乳をお茶でといた。背中の赤ん坊が、ウン、ウン、と言つてはね上る。私は彼女の背中から赤ん坊をおろさせて、抱いた。

「どこまでいらつしやるんですか」

「鹿児島まで行くんです」

「赤ちゃんのお乳を作るんじや大変ですね」

「え、でも、東京へ来るときは、もつと大変だったんですよ。赤ん坊も、上の子もまだ小さいし、それでもやつぱり私、ひとりで連れてきたんですよ」

やがて彼女は三人掛けの端しに腰をおろして、赤ん坊に乳をのませた。

乳をのませながら、彼女は胸につかえているものを吐き出すように言い出した。

「男つて、勝手ですねえ。封建的ですね」

三人がけのそばの会社員の男は、おとなしそうな人で、彼女の、封建的ですね、という言葉で、好意的に薄笑をした。

「去年、お父ちゃんが東京で働いているので、鹿児島から出てきたんですけど、東京は暮しにくいですわねえ。物価が騰くて、どうしてもやってゆけないですよ。お父ちゃんが、暫く田舎に帰つておれ、というので帰るんですけど」

私の前の中年の婦人も身体を差し出してうなずいている。男の子は母親から貰ったビスケットを食べていたが、いつか震動の継続に誘われて私の膝で居ねむりを始めた。

「すみませんねえ」

と言いながら母親は話しつづけて、

「何しろ、子どもが小さいから、私が働きに出るわけにもゆかないし、しょうがないんですよ。正月も近くなるでしょう。田舎に帰れば、うちが農家だから、お餅ぐらい食べられますからねえ」

彼女は気が善いとみえ、<sup>(ウ)</sup>見栄もなくぼそぼそと話す。三等車の中では、聞えるほどのものは同感して聞いているし、すぐ

その向うではまたその周囲の別の世界を作って、関りが**B**ない。彼女**B**は二人の子どもを連れ、明日までの汽車の中によろしく腰をおろしたふうだ。

ホームで妻子にあのような別れ方をした夫の方は、あれからどうしただろう。男の子とそっくりの、痩せて、顔も頭もほっそりした男だった。今日の気分の故か癪性(注7)な男に見えた。彼は外套(注8)のポケットに両手を突っ込んで、今日一日、行き場を失ったように歩きまわるのかもしれない。彼は気持(きもち)の持つてゆき場もなく、無性に腹が立っているかも知れない。彼は映画館に入る

だろうか。焼酎をのみにしているだろうか。部屋へ帰れば、この朝、慌ただしく妻子の出て行ったあとがまだそのまま残って、男の子のメンコ(注9)などが散らばっているかもしれない。彼はそれを片づけながら、ちよつと泣きたくなるかもしれない。口紅がずれてついていた妻の、つんと口を尖がらして横を向いていた顔が、苛々と目の前に出てくるだろうか。彼はひとりでふとんを引きずり出して転がり込む。ふとんの襟に妻子の臭いも残っている。彼は、彼の方に出ようとして、汽車の窓に片足をかけた小さい息子のズックをおもい出すだろうか。その時もうこの汽車は、山陽線のどこかを走っている。彼はもうすっかりひとりになった実感におそわれて、ふとんの襟をやけに頭の上にずり上げるだろうか。

私は闇の坐席を買った罪ほろぼしのようにせめて男の子を膝に抱いている。男の子のこっくりこっくりしていた頭を、私の胸にもたせかけておいた。が、子どもの眠りもやはり浅かったとみえ、少し経(た)つと彼は頭を上げた。眠りから覚めても、この男の子は何も言わず、母親の居るのを安心したように外を眺める。この男の子のおとなしさは、まるでこの頃からの我が家の空気を感じ取って、気兼ねをしていたようだ。

「ケイちゃん、おむすび食べる?」

母親は片手に赤ん坊を抱いている身体を曲げて、片方の手だけで籠の中からおむすびを探し出した。母親に声をかけられると、男の子はにやりと笑って、それを受け取った。そして、丁度海の見えている窓に立ったまま、そのむすびを食べていた。

列車の箱の中全体が、少し疲れてきて、あまり話し声もしなくなっていた。汽車の音も単調に慣れて私には見なれた東海道沿

岸の風景が過ぎてゆく。

ふと男の子の何か歌うように言っているのが耳に入ってきた。小さな声でひとり言のつぶやきのように、それを歌うように言っている。汽車の音響に混じって、それは次のように聞えてきた。

「<sup>C</sup>父ちゃん来い、父ちゃん来い」

しかし視線は、走り去る風景が珍らしいというように、みかんの木を追い、畑の鶏を見たりしているのだ。可憐に弱々しく、無心なつぶやきだけで、男の子は、その言葉を歌っていた。

(注) 1 二百円——当時、駅で売られていた一般的な弁当が百円程度、お茶が十五円程度だった。これらのことから、私が運賃とは別に男に支払った二百円は現在の二千円から三千円にあたると考えられる。

2 闇——闇取引の略。正規の方法によらずに商品を売買したり、本来は売買の対象ではないものを取り引きしたりすること。

3 所帯——住居や生計をともにする者の集まり。

4 ねんねこ絆纏——子どもを背負うときに上から羽織る、綿入れの防寒着。

5 誕生——ここでは生後満一年のことを指す。

6 ズック——厚地で丈夫な布で作ったゴム底の靴。

7 癩性——激しやすく怒りっぽい性質。神経質な性格を指すこともある。

8 外套——防寒、防雨用に着るコート類。

9 メンコ——厚紙でできた円形または長方形の玩具。相手のものに打ち当てて裏返らせるなどして遊ぶ。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14。

- (ア) 目くばせした
- 12
- ⑤ 目つきで合図した  
④ 目つきで気遣った  
③ 目つきで頼み込んだ  
② 目つきで制した  
① 目つきですごんだ

- (イ) 無造作に
- 13
- ⑤ 周囲の人たちを見下して  
④ 先を越されないように素早く  
③ 慎重にやらず投げやりに  
② いらだたしげに荒っぽく  
① 先の見通しを持たずに

- (ウ) 見栄もなく
- 14
- ⑤ 気後れすることなく  
④ 人前での礼儀も欠いて  
③ はつきりした態度も取らず  
② 自分を飾って見せようともせず  
① 相手に対して偉ぶることなく

問2 本文1行目から30行目までで、闇で買った座席に着くまでの私の様子が描かれているが、そのときの心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 闇で座席を買ったことをうしろめたく思いながらも、その座席が他の乗客と同じ金額であったことや、混雑した車中で座っていられることに安堵<sup>あんど</sup>している。
- ② 見知らぬ男に声をかけられてためらいながらも、座席を売ってもらったことや、前に座っているのが年配の女性であることに安心している。
- ③ 闇で座席を買わされたことを耐えがたく思いながらも、座席を買えたことや、自分と同じ方法で座席を買った人が他にもいることで気が楽になっている。
- ④ 闇で座席を買ってしまったことに罪の意識を感じながらも、前に座っている女性と親しくなつて、長い道中を共に過ごせることに満足している。
- ⑤ 闇で座席を買ったことを恥ずかしく思いながらも、満員の急行列車の中で座っていられることや、次の仕事の準備ができることにほっとしている。

問3 傍線部A「何か私の方が残念な気がして言い出す。」とあるが、このときの私の心情はどのようなものか。その説明として

最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 16。

- ① 座席を買えずに子どもや荷物を抱えて汽車に乗る母親の苦勞が思いやられたので、夫婦が険悪な雰囲気のまま別れることに耐えられなくなり、父親の示した優しさを彼女に伝えて二人を和解させたいと思った。
- ② 車内でいさかいを起こすような他人と私とは無関係なのに、父親と男の子が別れを惜しむ場面に共感してしまい、家族に対する夫の無理解を嘆くばかりの彼女にも、単身で東京に残る夫のことを思いやってほしいと訴えたくなった。
- ③ 自分が座っていられる立場にある以上、座席を買う余裕もなく赤ん坊の世話に追われる夫婦のいざこざを放っておいてはいけないように思え、せめて男の子が父親と別れたときのけなげな姿を母親に伝えたいと思った。
- ④ 偶然乗り合わせただけの関係なのに、その家族のやりとりを見てうちに同情心が芽生え、妻子を放り出して行つたように見えた夫にも、男の子を見送ろうとする父親らしさがあることを、彼女にも知らせたいと思った。
- ⑤ 父親と別れて落ち着かない男の子を預かっているうちに、家族の様子が他人事とは思えなくなり、おとなしくするよ  
うに言うばかりの母親に、周囲の物珍しさで寂しさを紛らわそうとする男の子の心情を理解してほしくなった。



問 4

傍線部B「彼女は二人の子どもを連れ、明日までの汽車の中にようやく腰をおろしたふうだ。」とあるが、私の推察している彼女の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①、⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① 子育てに理解を示さない夫のぶっきらぼうな言い方にいらだちを募らせていたが、周囲の乗客に励まされたことで冷静になることができた。今は、日ごろからいさかいを繰り返している夫のことを忘れ、鹿児島での生活に気持ちを向けている。

② 混雑する三等車で座席を確保する余裕もなく、日ごろから子育てを一人で担っていることへの不満も募っていたが、赤ん坊の世話をしていると席を空けてもらえた。偶然乗り合わせたに過ぎない周囲の人たちの優しさと気遣いに感激している。

③ 夫の無理解に対する不満を口にしてしまったが、その思いを周囲の乗客が同調するように聞いてくれたことでいらいちが多少和らいだ。今は、二人の小さな子どもを抱えて長い距離を移動する気苦労を受け入れるくらいに、落ち着きを取り戻している。

④ 出発前の慌ただしい時間の中で、赤ん坊のミルクを作るためのお茶を買いに列車の外へ出たが、発車の直前に何とか車内へ戻ることができた。乗り込むのさえ困難な三等車に乗り遅れることもなく母子三人で故郷に帰れることにほっとしている。

⑤ 周囲の人たちの協力もあり、むずかっていた赤ん坊にミルクを飲ませ、じっとしてられない男の子も眠り始めたので、やっと一息つくことができた。今は、鹿児島に戻らなければならない事情や夫婦間の不満をまくし立てるほど、周囲に気を許している。

問5 傍線部C「父ちゃん来い、父ちゃん来い」とあるが、この男の子の様子や声をめぐって私はどのようなことを考えているか。本文全体もふまえた説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

① 男の子は父親がいなくなった寂しさを抱えながらも、車内の騒がしさに圧倒されておとなしくしていた。次第に静まった車内で聞こえてきた歌声には、その寂しさが込められているかのようだ。私は、男の子の素直な言葉に、この家族が幸せになつてほしいという願いを重ね合わせている。

② 男の子はまだ幼いので、両親や周囲の大人に対して気持ちをうまく言葉にできないでいる。窓の外の風景に気を取られながら発した弱々しい声は、父親に自分のそばにいてほしいという願望を表しているかのようだ。私は、男の子の様子をいじらしく感じて、この家族のことを気がかりに思っている。

③ 男の子は父親の怒りっぽい性格のために家族がしばしば険悪な雰囲気になることを感じ、車外の風景でその悲しみを慰めている。男の子の弱々しいつぶやきは、父親に対する恋しさを伝えようとしているかのようだ。私は、男の子の様子や声を通じて、この家族の悲哀を感じている。

④ 男の子は両親の不和に対してやるせない思いを抱えているが、珍しい風景を眺めることでそれを紛らわしている。男の子の弱々しい声には、父親に家族と一緒にいてほしいという思いが表れているかのようだ。私は、かわいそうな男の子の様子を見かねて、家族に対する父親の態度が改まることを願っている。

⑤ 男の子は父親のことだけは信頼しているようだが、まだ三歳くらいなので自分のその思いをはっきりと伝えられるわけではない。男の子のつぶやきは、そうした父親と男の子との絆を<sup>きずな</sup>表しているかのようだ。私は、無邪気にはしゃぐ男の子の姿を通じて、父親が家族に愛情を注ぐことを祈っている。

問6 この文章の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

19

20

① 三等車内の描かれ方を見ると、20行目「小さな所帯をいっぱい詰め込んだように」では車内全体が庶民的な一体感に包まれていることが表されているが、135行目「列車の箱の中全体が、少し疲れてきて」では、そのような一体感が徐々に壊れ始めていることが表されている。

② 汽車に乗り込んできた家族について、37行目「普段着のままの格好」、73行目「はき古したズックの黒い靴」、89行目「毎日八百屋の買物に下げていたらしい古びた籠」のようにその身なりや持ち物を具体的に描くことは、この家族の生活の状態やその暮らしが私とは異なることを読者に推測させる効果を持っている。

③ 夫婦が車内で一緒にいる場面では、「人混みにのぼせたように泣き出しはじめた」「いよいよのけ反って、混雑した車内のざわめきをかき立てるように泣く」など、赤ん坊の泣く様子が詳細に描かれている。これによって、出発前の慌ただしく落ち着かない様子や夫婦の険悪な雰囲気、より強調されている。

④ 99行目から115行目にかけての母親のセリフでは、昨年からの東京暮らしに対する我慢できないいらだちが語られている。ここでは短いセリフと長いセリフを交互に配したり、読点を多用したりすることによって、母親が話をするにつれ次第に気持ちを高ぶらせていく様子が表されている。

⑤ 母子と別れた後の父親を私が想像する部分には、「くかもしれない」「くかも知れない」「くだろうか」といった文末表現が立て続けに繰り返されている。これによって、家族を思う父親の心情や状況に私が思いをめぐらせる様子が、効果的に表されている。

⑥ 母子と別れた後の父親を私が想像する部分には、「男の子とそっくりの、痩せて、顔も頭もほっそりした男」「口紅がずれてついていた妻」「汽車の窓に片足をかけた小さい息子のズック」という、この部分以前に言及されていた情報がある。これらは私の想像が実際の観察をもとにしていることを表している。

### 第3問

次の文章は、『今昔物語集』の一節である。京で暮らす男が、ある夜、知人の家を訪れた帰りに鬼の行列を見つけ、橋の下に隠れたものの、鬼に気づかれて恐れおののく場面から始まる。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

男、「今は限りなりけり」と思ひてある程に、一人の鬼、走り来たりて、男をひかへてゐて上げぬ。鬼どもの言はく、「この男、重き咎あるべき者にもあらず。許してよ」と言ひて、鬼、四五人ばかりして男に唾を吐きかけつつ皆過ぎぬ。

その後、男、殺されずなりぬることを喜びて、心地違ひ頭痛けれども、(ア) 念じて、「とく家に行きて、ありつる様をも妻に語らむ」と思ひて、急ぎ行きて家に入りたるに、妻も子も皆、男を見れども物も言ひかけず。また、男、物言ひかくれども、妻子、答へもせず。しかれば、男、「あさまし」と思ひて近く寄りたれども、傍らに人あれども思はず。その時に、男、心得るやう、「早う、鬼ども a の我に唾を吐きかけつるによりて、我が身の隠れにけるにこそありけれ」と思ふに、A 悲しきこと限りなし。我は人見ること元のごとし。また、人の言ふことをも障りなく聞く。人は我が形をも見ず、声をも聞かず。しかれば、人の置きたる物を取りて食へども、人これを知らず。かやうにて夜も明けぬれば、妻子は、我を、「夜前、人に殺されにけるなんめり」と言ひて、嘆き合ひたること限りなし。

さて、日ごろを経るに、せむ方なし。しかれば、男、(注1) 六角堂に参り籠もりて、「観音、我を助け給へ。年ごろ頼みをかけ奉り

て参り候ひつる験には、元のごとく我が身を顕し給へ」と祈念して、籠もりたる人の食ふ物や金鼓の米などを取り食ひてあれど

も、傍らなる人、知ることなし。かくて二七日ばかりにもなりぬるに、夜寝たるに、暁方の夢に、御帳の辺、尊げなる僧出でて、男 b の傍らに立ちて、告げてのたまはく、「汝、すみやかに、朝ここより罷り出でむに、初めて会へらむ者の言はむことに従ふべし」と。かく見る程に夢覚めぬ。

(注5) 夜明けぬれば、罷り出づるに、門のもとに牛飼の童 c のいと恐ろしげなる、大きな牛を引き来て会ひたり。男を見て言はく、「いざ、かの主、我が供に」と。男、これを聞くに、「我が身は顕れにけり」と思ふに、うれしくて、B 喜びながら夢を頼み

て童の供に行くに、西ざまに十町ばかり行きて、大きな棟門(注6)あり。門閉ぢて開かねば、牛飼、牛をば門に結びて、扉の迫(はさま)dの人通るべくもなきより入るとて、男を引きて、「汝もともに入れ」と言へば、男、「いかでかこの迫(はさま)よりは入らむ」と言ふを、童、「ただ入れ」とて男eの手を取りて引き入るれば、男もともに入りぬ。見れば、家の内大きにて、人、極めて多かり。

童、男を具して板敷(注7)きに上りて、内へただ入りに入るに、(ウ)いかにと言ふ人あへてなし。はるかに奥の方に入りて見れば、

姫君、病に悩み煩ひて臥(ふ)したり。跡・枕(あと・まくら)に女房たち居並(ゐな)みてこれをあつかふ。童、そこに男をゐて行きて、小さき槌(つづ)を取らせ、この煩ふ姫君の傍らに据ゑて、頭を打たせ腰を打たす。その時に、姫君、頭を立てて病みまどふこと限りなし。しかれば、

父母、「この病、今は限りなんめり」と言ひて泣き合ひたり。見れば、誦經(ずきやう)を行ひ、また、やむことなき験者(げんざ)を請(しやう)じに遣はすめ

り。しばしばかりありて、験者来たり。病者の傍らに近く居て、心經(しんきやう)を読みて祈るに、この男、尊きこと限りなし。身の毛いよたちて、そぞろ寒きやうにおぼゆ。

しかる間、この牛飼の童、この僧をうち見るままに、ただ逃げに逃げて外(ほか)ざまに去りぬ。僧は不動の火界の呪(しゆ)を読み、病者を加持する時に、男の着る物に火付きぬ。ただ焼けに焼くれば、男、声を上げて叫ぶ。しかれば、男、真蹟(まあらは)になりぬ。その時に、家の人、姫君の父母より始めて女房ども見れば、いといやしげなる男、病者の傍らに居たり。あさましくて、まづ男を捕へて引き出だしつ。「こはいかなることぞ」と問へば、男、事のあり様をありのままに初めより語る。人皆これを聞きて、「希有(けう)なり」と思ふ。しかる間、男、顛れぬれば、病者、搔(か)きのごふやうに癒えぬ。しかれば、一家、喜び合へること限りなし。

その時に、験者の言はく、「この男、咎あるべき者にもあらず。六角堂の観音の利益(りやく)を蒙(かう)れる者なり。しかれば、すみやかに許さるべし」と言ひければ、追ひ逃がしてけり。しかれば、男、家に行きて、C事のあり様を語りければ、妻、「あさまし」と思ひながら喜びけり。

かの牛飼は神の眷属(けんぞく)にてなむありける。(注12)人の語らひによりてこの姫君に憑(つ)きて悩ましけるなりけり。(注13)

(注)

- 1 六角堂——京にある、観音信仰で有名な寺。
- 2 金鼓の米——寺に寄付された米。
- 3 二七日——十四日間。
- 4 御帳——観音像の周りに垂らしてある布。
- 5 牛飼の童——牛車ぎうしゃの牛を引いたり、その牛の世話をしたりする者。「童」とあるが、必ずしも子どもとは限らない。
- 6 棟門——門の一種。身分の高い人の屋敷に設けられることが多い。
- 7 板敷き——建物の外側にある板張りの場所。
- 8 跡・枕——姫君の足元と枕元。
- 9 験者——加持祈禱かじきとうを行う僧。
- 10 心経——『般若心経』はんにやしんぎょうという經典のこと。
- 11 不動の火界の呪——不動明王の力によって災厄をはらう呪文。
- 12 眷属——従者。
- 13 人の語らひ——誰かの頼み。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

23

(ア)

21

念じて

- ⑤ 感謝して  
④ 用心して  
③ 我慢して  
② 祈願して  
① 後悔して

(イ)

いかでかこの迫<sup>はたら</sup>よりは入<sup>はい</sup>らむ

22

- ⑤ こんな隙間からは入<sup>はい</sup>りたくない  
④ この隙間からなら入<sup>はい</sup>れるだろう  
③ なんとかこの隙間から入<sup>はい</sup>りたい  
② いつからこの隙間に入<sup>はい</sup>れるのか  
⑤ この隙間からは入<sup>はい</sup>れないだろう

(ウ)

いかにと言ふ人あへてなし

23

- ⑤ 見とがめる人は誰もいない  
④ 面識のある人は誰もいない  
③ どの家人とも会えていない  
② 案内してくれる人はいない  
⑤ 喜んで出迎える人はいない

問2 波線部 aゝ e の「の」を、意味・用法によって三つに分けると、どのようなになるか。その組合せとして最も適当なものを、

次の①ゝ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

- |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| ⑤     | ④     | ③     | ②     | ①     |
| 〔a〕   | 〔a d〕 | 〔a〕   | 〔a b〕 | 〔a〕   |
| と     | と     | と     | と     | と     |
| 〔b d〕 | 〔b e〕 | 〔b c〕 | 〔c d〕 | 〔b e〕 |
| と     | と     | と     | と     | と     |
| 〔c e〕 | 〔c〕   | 〔d e〕 | 〔e〕   | 〔c d〕 |



問3 傍線部A「悲しきこと限りなし」とあるが、男がそう感じた理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちか

ら一つ選べ。 解答番号は 25。

- ① とくに悪いことをした覚えもないのに、鬼に捕まって唾をかけられるという屈辱を味わったから。
- ② 鬼に捕まって唾をかけられた後でひどく頭が痛くなり、このままでは死んでしまうと思ったから。
- ③ 鬼から逃げ帰ったところ妻子の様子が変わり、誰が近くに寄っても返事をしなくなっているから。
- ④ 自分の姿が、鬼に唾をかけられたことで周りの人々には見えなくなっていることに気づいたから。
- ⑤ 夜が明けても戻らなかったため、自分が昨夜誰かに殺されてしまったと妻子が誤解しているから。

問4 傍線部B「喜びながら夢を頼みて童の供に行く」とあるが、この時の男の行為の説明として最も適当なものを、次の①、

⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 26。

① 夢の中に現れた僧に、朝六角堂から出てきた人について行くように言われ、六角堂の門の前で待っていると、牛飼が出てきたため、夢のお告げの内容を話して一緒に連れて行ってくれるように頼んでみたところ、牛飼が快く引き受けてくれたので、喜んでついて行った。

② 夢の中に現れた僧に、朝六角堂を出て最初に出会った者に元の姿に戻る方法を尋ねるように言われたため、六角堂を出た時に会った牛飼に夢のお告げをあてにして相談したところ、すぐれた験者のもとに連れて行ってやろうと言われたので、喜びながらついて行った。

③ 夢の中に現れた僧に、朝六角堂を出て最初に出会った者の言うことに従うように告げられて外に出ると、現れたのが怪しげな牛飼だったために不安を抱いたが、姿が見えないはずの自分に声をかけてきたことを喜び、半信半疑ながらも牛飼の言葉に従ってついて行った。

④ 夢の中に現れた僧に、朝六角堂を出て最初に出会った者の言うことに従うように告げられ、六角堂を出たところ、門のあたりにいた牛飼が声をかけてきたので、自分の姿が見えるようになったと思って喜び、夢のお告げを信じて、牛飼の言うことに従ってついて行った。

⑤ 夢の中に現れた僧に、朝六角堂を出て牛飼に出会ったらついて行くように告げられたところ、その通りに牛飼に出会ったので、夢のお告げが信用できることを確信して、この牛飼について行けば、きっと妻子と再会することができるだろうと喜び勇んでついて行った。

問5 傍線部C「事のあり様を語りければ」とあるが、その内容として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は

27。

- ① 鬼に唾をかけられた後、男の姿が周囲の者には見えなくなり、男が言葉をかけても相手には聞こえなくなった。
- ② 元の姿に戻れなくなった男は、六角堂の観音に対して、長年参詣して帰依していることを訴えて助けを求めた。
- ③ 男が牛飼に連れられて屋敷に入ると、病気で苦しむ姫君が寝ていて、女房たちが並んで座って看病をしていた。
- ④ すぐれた験者が読経をしたことによつて男は尊い存在となり、姫君の傍らに姿を現すと、姫君の病気が治った。
- ⑤ 姫君の家の者は男を捕らえたが、験者は男が六角堂の観音の加護を受けた者だと見抜いて、許すように言った。

問6 この文章の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。 解答番号は 28。

- ① 験者は、病に苦しむ姫君を助けるために呪文を唱え、姫君に取り憑いていた牛飼の正体を暴いて退散させ、さらに男を牛飼から解き放してやった。
- ② 験者は、読経を聞いて寒がっている男の気配を察して、助けてやろうと不動の火界の呪を唱えたが、加減ができずに男の着物を燃やしてしまった。
- ③ 六角堂の観音は、男の祈りに応えて、男を姫君に取り憑いていた牛飼と出会わせて、姫君を加持する験者の呪文を聞くことができるように導いた。
- ④ 六角堂の観音は、牛飼を信頼して男を預けたが、牛飼が男を救わず悪事に利用しただけだったため、験者の姿となって現れ、牛飼を追いはらった。
- ⑤ 牛飼は、取り憑いて苦しめていた姫君のもとに男を連れて行き、元の姿に戻すことと引き替えに、姫君の病気を悪化させることを男に手伝わせた。
- ⑥ 牛飼は、指示を受けてやむなく姫君を苦しめていたが、内心では姫君を助けたかと思っていたので、験者が来てくれたのを機に屋敷から立ち去った。

#### 第4問

次の文章は、盧文昭のもとに張荷宇が持ってきた一枚の絵について書かれたものである。これを読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 50）

荷宇<sup>ハ</sup>生<sup>マレテ</sup>十月<sup>ニシテ</sup>而<sup>ウシナフ</sup>喪<sup>ニ</sup>其<sup>ヲ</sup>母<sup>ヲ</sup>及<sup>ビ</sup>有<sup>ルニ</sup>知<sup>チ</sup>、即時<sup>オモヒテ</sup>時<sup>ヲ</sup>念<sup>レ</sup>母<sup>ヲ</sup>不<sup>カ</sup>置<sup>イ</sup>、弥<sup>シク</sup>久<sup>シテ</sup>

弥<sup>アフシ</sup>篤<sup>ニ</sup>哀<sup>ニ</sup>其<sup>ヲ</sup>身<sup>ヲ</sup>不<sup>カ</sup>能<sup>ズ</sup>一<sup>ニ</sup>日<sup>ヲ</sup>事<sup>ス</sup>乎<sup>ニ</sup>母<sup>ヲ</sup>也<sup>ニ</sup>。哀<sup>カナシム</sup>母<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>言<sup>ハ</sup>語<sup>ヲ</sup>動<sup>モ</sup>作<sup>マタ</sup>亦<sup>ダ</sup>未<sup>ル</sup>

能<sup>ハ</sup>識<sup>シル</sup>也<sup>ニ</sup>。

荷宇<sup>ハ</sup>香<sup>カウ</sup>河<sup>ガ</sup>人<sup>ナリ</sup>嘗<sup>カフテ</sup>南<sup>ニ</sup>遊<sup>ビテ</sup>而<sup>カヘルニ</sup>反<sup>ル</sup>至<sup>ニ</sup>乎<sup>ニ</sup>錢<sup>セン</sup>唐<sup>タウニ</sup>夢<sup>ミ</sup>母<sup>ヲ</sup>来<sup>スルヲ</sup>前<sup>ニ</sup>夢<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>即<sup>チ</sup>

知<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>為<sup>ルヲ</sup>母<sup>也</sup>。既<sup>ニ</sup>覺<sup>メ</sup>乃<sup>チ</sup>噉<sup>ケウ</sup>然<sup>トシテ</sup>以<sup>テ</sup>哭<sup>コクシテ</sup>曰<sup>ハク</sup>「此<sup>レ</sup>真<sup>ニ</sup>吾<sup>ガ</sup>母<sup>也</sup>。母<sup>ヨ</sup>胡<sup>なん</sup>為<sup>スレゾ</sup>乎<sup>ニ</sup>」

使<sup>ムル</sup>我<sup>ヲ</sup>至<sup>リテ</sup>今<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>乃<sup>チ</sup>得<sup>ル</sup>見<sup>ル</sup>也<sup>ニ</sup>。母<sup>ヨ</sup>又<sup>タ</sup>何<sup>ソ</sup>去<sup>ルコト</sup>我<sup>ヲ</sup>之<sup>ノ</sup>速<sup>ヤカル</sup>也<sup>ニ</sup>。母<sup>ヨ</sup>其<sup>レ</sup>可<sup>ケン</sup>使<sup>ム</sup>我<sup>ヲ</sup>

繼<sup>ギテ</sup>此<sup>ヲ</sup>而<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>見<sup>ル</sup>也<sup>ト</sup>。於<sup>イテ</sup>是<sup>ニ</sup>即<sup>シテ</sup>夢<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>見<sup>ル</sup>為<sup>ツクル</sup>之<sup>ガ</sup>凶<sup>ヲ</sup>。此<sup>ノ</sup>凶<sup>ハ</sup>吾<sup>ノ</sup>不<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>見<sup>ル</sup>也<sup>ニ</sup>。

今<sup>ニ</sup>之<sup>ハ</sup>凶<sup>ハ</sup>吾<sup>ノ</sup>見<sup>ルニ</sup>之<sup>ヲ</sup>、則<sup>チ</sup>其<sup>ノ</sup>夢<sup>ミル</sup>母<sup>ヲ</sup>之<sup>ノ</sup>境<sup>ナル</sup>而<sup>レ</sup>已<sup>ニ</sup>。

余<sup>ハ</sup>因<sup>リテ</sup>語<sup>リテ</sup>之<sup>ニ</sup>曰<sup>ハク</sup>「夫<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>精<sup>ニ</sup>誠<sup>ズル</sup>所<sup>ニ</sup>感<sup>スル</sup>無<sup>キハ</sup>幽<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>死<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>隔<sup>テ</sup>此<sup>レ</sup>理<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>

可<sup>ク</sup>信<sup>ズ</sup>不<sup>ル</sup>誣<sup>シヒ</sup>者<sup>ナリ</sup>況<sup>シヤ</sup>子之於<sup>ケル</sup>親<sup>ニ</sup>其<sup>ヲ</sup>喘<sup>ゼン</sup>息<sup>ソク</sup>呼<sup>フ</sup>吸<sup>モ</sup>相<sup>ヒ</sup>通<sup>ジ</sup>本<sup>ヨリ</sup>無<sup>キヲ</sup>有<sup>ル</sup>二<sup>ヘダツル</sup>間<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>  
者<sup>ト</sup>乎<sup>ト</sup>」

(盧文弨『抱經堂文集』による)

(注) 1 香河——県名。今の北京の東にあった。

2 錢唐——県名。今の杭州。香河からは千キロメートルあまり離れる。

3 来前——目の前にやってくる。

4 噉然——大声をあげるさま。

5 幽明死生——あの世とこの世、生と死。

6 誣——いつわる。ゆがめる。

7 喘息呼吸——息づかい。

問1 波線部(1)「有<sup>レ</sup>知」・(2)「遊」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 29 ・ 30。

- (1) 「有<sup>レ</sup>知」
- |          |          |        |        |        |  |
|----------|----------|--------|--------|--------|--|
| 29       |          |        |        |        |  |
| ⑤        | ④        | ③      | ②      | ①      |  |
| ものごとくがつく | 知り合いができる | うわさを聞く | 教育を受ける | 世に知られる |  |

- (2) 「遊」
- |               |               |               |               |              |  |
|---------------|---------------|---------------|---------------|--------------|--|
| 30            |               |               |               |              |  |
| ⑤             | ④             | ③             | ②             | ①            |  |
| 低い地位にしばらく甘んじて | 故郷を離れ遠方の地を訪ねて | 世を避けて独り隠れ暮らして | 気ままに派手な生活を送って | 仕事もせずにぶらぶらして |  |

問2 二重傍線部(ア)「即」・(イ)「乃」はここではそれぞれどのような意味か。その組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- |   |          |          |
|---|----------|----------|
| ① | (ア) すぐに  | (イ) そこで  |
| ② | (ア) 意外にも | (イ) まさしく |
| ③ | (ア) そこで  | (イ) すぐに  |
| ④ | (ア) すぐに  | (イ) まさしく |
| ⑤ | (ア) 意外にも | (イ) そこで  |



問3 傍線部A「時時念<sup>レ</sup>母不<sup>レ</sup>置」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

32。

- ① いつも母のことを思い続けてやむことがなく
- ② 繰り返し母のことを思っては自らの心を慰め
- ③ 時折母のことを思うといたたまれなくなり
- ④ ある日母のことを思ってもの思いにふけり
- ⑤ ずっと母のことを思いながらも人には言わず

問4 傍線部B「哀其身不能一日事乎母也」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次

の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- |   |   |
|---|---|
| ① 哀 <sub>レ</sub> 其身 <sub>二</sub> 不 <sub>レ</sub> 能 <sub>一</sub> 一日事乎母 <sub>也</sub> | 其の身を哀 <sup>かな</sup> しみ一日の事を母に能 <sup>よ</sup> くせざるなり    |
| ② 哀 <sub>レ</sub> 其身 <sub>二</sub> 不 <sub>レ</sub> 能 <sub>一</sub> 一日事乎母 <sub>也</sub> | 其の身を哀しみ一日として母に事 <sup>つか</sup> ふる能 <sup>あた</sup> はざるなり |
| ③ 哀 <sub>レ</sub> 其身 <sub>二</sub> 不 <sub>レ</sub> 能 <sub>一</sub> 一日事乎母 <sub>也</sub> | 其の身の一日の事を母に能くせざるを哀しむなり                                |
| ④ 哀 <sub>レ</sub> 其身 <sub>二</sub> 不 <sub>レ</sub> 能 <sub>一</sub> 一日事乎母 <sub>也</sub> | 其の身の一日として母に事ふる能はざるを哀しむなり                              |
| ⑤ 哀 <sub>下</sub> 其身 <sub>二</sub> 不 <sub>レ</sub> 能 <sub>一</sub> 一日事乎母 <sub>也</sub> | 其の身の一日として事ふる能はざるを母に哀しむなり                              |

問5 傍線部C「母、胡為乎使<sub>下</sub>我至今日乃得<sub>レ</sub>見也」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 34。

- ① お母様、なぜ今日になって私がここにいるとわかったのですか。
- ② お母様、なぜ今日になって私をここに来させたのですか。
- ③ お母様、なぜ今日になって私を思い出してくださったのですか。
- ④ お母様、なぜ今日になって私に会ってくださったのですか。
- ⑤ お母様、なぜ今日になって私の夢を理解してくださったのですか。

問6 傍線部D「此図」と、実際に見たE「今之図」とは、どのように異なっているか。その説明として最も適当なものを、次

の①、⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① Dは荷宇が母の夢を見る場面の描かれた絵であるが、Eは荷宇が夢を見た土地の風景が描かれた絵である。
- ② Dは荷宇が母の夢を見る場面の描かれた絵であるが、Eは荷宇の夢に現れた母の姿が描かれた絵である。
- ③ Dは荷宇の夢に現れた母の姿が描かれた絵であるが、Eは荷宇が母の夢を見る場面の描かれた絵である。
- ④ Dは荷宇の夢に現れた母の姿が描かれた絵であるが、Eは荷宇が夢を見た土地の風景が描かれた絵である。
- ⑤ Dは荷宇が夢を見た土地の風景が描かれた絵であるが、Eは荷宇の夢に現れた母の姿が描かれた絵である。

問7 傍線部F「余因語之曰」以下についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号

は  
36。

① 「まことの心は生死をも超えて相手に通じるものであり、まして親が我が子を見捨てるはずはない。」と言って、そうであれば荷宇の母が夢に現れたのは事実だと、夢の神秘を分析し納得している。

② 「まことの心は生死をも超えて相手に通じるとはいえ、やはり子が親と離れるのはつらいことだ。」と言って、まったくあなたが夢でしか母に会えないとは痛ましいと、荷宇の境遇に同情し悲しんでいる。

③ 「まことの心は生死をも超えて相手に通じるものであり、まして親が我が子から離れることはない。」と言って、やはり子に対する母の思いにまさるものはないと、母の愛情を評価したたえている。

④ 「まことの心は生死をも超えて相手に通じるとはいえ、やはり子は親と固く結ばれるべきだ。」と言って、それなのに荷宇が幼くして母を失ったのはむごいことだと、運命の非情を嘆きつつ憤っている。

⑤ 「まことの心は生死をも超えて相手に通じるものであり、まして子は親と固く結ばれている。」と言って、だから母に對するあなたの思いは届いたのだと、荷宇の心情に寄り添いつつ力づけている。